

一週間後には「敬老の日」を迎えます。今日は少し早いのですが礼拝後シャローム感謝の時と題して、ご高齢の方々が教会に居てくださることを神様に感謝し、人生の先輩方の上に、神様の守りと祝福が豊かにありますように祈り、互いに主にあつて励ましあうひと時となることを願っております。

今日の説教題は「人生に欠かせないこと」というものです。字の通り、私達の人生にとって欠かせない事柄、別の言い方をすればこれさえあれば安心して人生を過ごすことが出来る二つの事柄について話してゆきたいと思います。その二つとは「死への備え」と「救いを見ること」です。自分自身そのテーマで話すことに少しためらいがありましたがやはりこの機会に語っておくべきことと示され、語らせていただくこととしました。

まず「死への備え」ということです。クリスチャン医師で精神世界のことに造詣の深いポール・トゥルニエは自著「人生の四季」の中で人生を「春、夏、秋、冬」の四つの季節に分けました。ご想像がつくように老年は「冬」にあたります。現代は高齢化とともに「冬」の期間が長くなっています。人生の冬をどう過ごすかは高齢の方々の課題です。高齢者のことについて少し統計を見てみますと一昨年、アメリカには、世界で一番多くの百歳以上の人がいて、その数はおよそ7万人強です。二番目に多いのは日本で、ほぼ7万人弱です。けれども、アメリカの人口は日本の三倍近くですから、人口の比率から言えば、日本が百歳以上の人がいちばん多い国になります。日本で百歳以上の人の数を数え始めたのは1963年(57年前)で、そのときは153名しかいませんでした。ですから統計上約60年間で450倍になっています。長寿であることだけが幸せの基準とするならば日本は世界で最も幸せな国ということになります。ちょっと考えてしまいますね。

聖書は、私たちの地上の限られた人生は、天での永遠の人生への準備であると教えています。私たちの人生は確かに「春、夏、秋、冬」の四季を通りますが、「冬」で終わるではありません。人生の「冬」のあとには天の「春」が待っています。人生の冬の期間には、天の春に備えるという仕事があるのです。三浦綾子さんは、癌にかかり、執筆活動ができなくなった時も、「わたしにはまだ仕事があります。それは『死ぬ』という仕事です」と言いました。三浦さんが『死ぬ』という仕事と言ったのには、深い意味があります。それは、いのちあるうちに好きなことをするか、身辺整理をしておくとかいったこと以上のものです。死とは何なのか。人はなぜ死ぬのか。死はどこから来たのか。死を克服する道はあるのか。そういったことを真剣に問い、天を目指す旅を、最後の一步まで歩みきること、それがほんとうの意味で、死に備えること、『死ぬ』という仕事となります。これが、永遠の「春」への希望を確かなものとするために、冬の期間にしておかなければならないことなのです。この準備は高齢者の方に限りません。

次に「死」に備える、最善の準備は、今朝の聖書のことばを使って言うなら、「救いを見る」ことです。クリスマスでもないのにこの箇所を選びましたのは神の救いをシメオンは見て、体験したからです。神の救いを待ち望んでいたシメオンは、赤ちゃんのイエスを抱き、「主よ。今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです」(29-30節)と言いました。「私は救いを見ました。これで、私は安らかに死ぬことができます」とシメオンは言ったのです。「安らかな死」。死は死でも、「平安の中での死」それは、神の「救いを見る」ことによってはじめて与えられるのです。

「死」は罪から来ます。ローマ 6:23 に「罪から来る報酬は死です」とある通りです。しかし、神は、死ぬべき人間をあわれんで、たとえ、一度はからだの死を体験しても、その霊は永遠に神と共に生きる道を開いてくださいました。それが、イエス・キリストの十字架と復活による罪の赦しと永遠のいのちで

す。キリストは、ほんとうは私たちが受け取るべき罪の報酬を私たちに代わって受け取り、罪の償いを果たし、私たちに赦しを与えてくださいました。そればかりでなく、復活によって、私たちが死の束縛から解放し、永遠のいのちを授けてくださいました。それでローマ 6:23 は、「罪から来る報酬は死です」と言ったあと、「しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです」と力強く、永遠のいのちを宣言しているのです。もし、聖書が「罪から来る報酬は死です」だけで終わっていたら、それはなんと悲しく、絶望的なことばでしょう。しかし、イエス・キリストから来る「永遠のいのち」という福音で、その文章を締めくくっています。聖書は、このように、イエス・キリストにある救いの出来事を告げ知らせる書物なのです。

イエス・キリストの救いは、人類の歴史のただ中でなされ、誰の目にも明らかなのに、なぜ、人々はこの救いを「見る」ことをしないのでしょうか。それは、罪の赦しや永遠の命を切実に求めていないからです。人は、自分の興味のあるものには目ざとく、決して見逃しませんが、興味のないものは、たとえ、目に入っている、「へえ、そんなものあったかな…」と心に留まらないことが多いのです。

しかし、大きな失敗を犯したとき、自分のせいでトラブルが起こり、それに巻き込まれたときなどは、自分の罪深さや惨めさを思い知らされます。そんなときには、ふだん見えていなかったキリストにある罪の赦しが見えて来ます。また、余命いくばくもないことを知ったとき、生きるか死ぬかという瀬戸際に立たされたとき、愛する者の死を体験したときには、人はふだんは考えなくても、その魂においては求めている、永遠のことがらに目を向けはじめます。死が怖いと感じること自体、私たちの魂が反応していることの証明となります。

人は年をとると、視力が衰え、目も霞んでいきます。若いころは、目で見たことがそのまま写真のように頭脳に焼き付けられたのに、年齢を重ねると、それがまるでピンボケの写真のようにしか頭脳に写らなくなります。しかし、信仰者のたましいの目は、年齢を重ねることによってさらに開かれてきます。シメオンは、イエスの説教を聞いたわけではありません。病気をいやし悪霊を追放する力あるわざを見たわけでもありません。ましてや十字架や復活は、シメオンが生後 40 日目のイエスを抱いたときから 30 年以上も先のことです。なのに、シメオンは赤ちゃんのイエスの中にすでに救いを見ていました。シメオンの信仰の目は研ぎ澄まされていたのです。シメオンが「私は救いを見ました。これで、私は安らかに死ぬことができます」と言ったように、ご高齢の方々には、イエス・キリストの救いを「見る」という大切な仕事が残っています。これをしないではこの世を去ることはできません。ご高齢の方々がキリストの救いを「見る」幸いを体験してくださるよう、心から願い、祈ります。

また、すでにイエス・キリストを「見て」いる方々は、もっと、イエス・キリストを見つめ、イエス・キリストの中にある救いの豊かさを味わい続けていただきたいと思います。そのようにして、キリストの救いを見ているみなさんが、他の人々に救いを「見せる」人になっていただきたいと思います。シメオンはまた、幼子イエスについて、「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人々が倒れ、また、立ち上がるために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています」(34 節)と語りました。ここで「しるし」と言われているのは「十字架のしるし」のことです。十字架は、本来はのろいと滅びの「しるし」ですが、それはイエスによって救いと祝福の「しるし」となりました。イエスの十字架は救いのしるしですが、シメオンもまた、その救いのしるしを指し示す「しるし」となったのです。年老いても、ひたすらにイエスを見つめて歩み続ける、みなさんの信仰の歩みが、多くの人々に救いの「しるし」となりますよう、心から願います。